

## 死神に託された中世ヨーロッパからのメッセージ

08K036 酒井彬江

### はじめに

グリム童話と言えばハッピーエンドの話が多いが、そんな話の中でも当たり前のこととして「死」は描かれている。中には「雪白姫」のように死によって始まり、死によって終わる話もある。

グリム童話にとって「死」は多くの場合、勧善懲悪のための手段として描かれているが、「赤ずきん」のように新しい自分に生まれ変わる過程として描かれていたり、「なでしこ」のように苦難からの解放として描かれていたりもする。また、グリム童話に付随している10話の聖者伝説の内、6話も死を信心深い者への褒美とした話がある<sup>(1)</sup>。

このレポートでは、そんな中で「死」を具現化した「死神」が登場する話では「死」がどう描かれているのか、そして、どのようなメッセージが込められているのか迫ってみたいと思う。

### 1. 死神に見る中世ヨーロッパの思想

ここでは「死神の名付け親」全2話の内、第1話を通して、死神の登場する話にはどのようなメッセージが込められているのか検討していきたい。

また、この話のルーツは1300年代にペストが流行った時期とされている<sup>(2)</sup>ので、それと照らし合わせて、中世の人々の心情にも迫ってみたいと思う。

話は貧乏な男が、生まれた息子の名付け親に困り、最初に出会った人に名付け親を頼もうと、通りへ飛び出す所から始まる。男が最初に出会ったのは神様であったが、神様は金持ちと貧乏人を平等に扱ってくれないと言い、自ら神様の申し出を断ってしまう。次に悪魔と出会うがそれも断り、その後に出会ったのが死神だった。男は死神が人を平等に扱うので気に入る、死神を名付け親に決める。それから息子が大きくなると、死神がやって来て、彼を名医にするために病人の生死の見分け方や治せる場合に飲ませる薬草について教える。息子は世界一の名医となり、お金持ちにもなる。そんな時、王様が病気になる、死の判定が出たのだが、医者には死神を出し抜こうと考え、実行し、成功する。死神は怒り、警告する。すると今度は姫が病気になるのだが、医者は姫と結婚したくて、再度死神を出し抜く。怒った死神は医者を地下世界に連れて行く。そこには沢山の人間の命を模した蠟燭が並んでいる。医者は命乞いをするが聞き入れてもらえず、死神に仕返しされて死んでしまう、という内容である。

第1話には主に3つのメッセージ、すなわち、不信心者への批判、医者への批判そして「死」の絶対性が込められていると考えられる。では、それぞれについて掘り下げてみよう。

#### (1) 不信心者への批判

1つ目として不信心者への批判が挙げられる。この場合の不信心者とは医者のお父さんである。お父さんは話の中で、2つの過ちを犯している。1つは一番始めに出会った人に名付け親を頼もうと決めたにもかかわらず、それを実行しなかったことで、もう1つは神様を蔑ろにしたことである。

これらの過ちにはお父さんに投影された中世ヨーロッパの人々の価値観が関わっている。このお父さんは常に「平等である」ことを最上としていた。だから、貧乏人のお父さんは金持ちと貧乏人を平等に扱わず、貧乏人が

お腹を空かせていても知らん顔をしている神様を蔑ろにし、申し出を受け入れなかった。

この「平等」を重視する価値観は14世紀に起きた封建社会の衰退で一部の市民や農民の地位が向上したこと、教皇権の衰退で絶大だったキリスト教や神の力が弱まったこと、そして特にペストの流行で人々にとって死が身近となり、死の思想が広がったことにより生まれたものだと思う。因みに人々のキリスト教に対する不信感やキリスト教の形式化は、話の中で神様を蔑ろにした不信心者と思われる父親でも子供に洗礼を受けさせようとしていることから窺える。当時の人々にとって、一番平等に感じられ、受け入れられたのは父親の言うように金持ちも貧乏人も関係なくさらっていく「死」だったのである。

また、この父親のように家族のために昼も夜も一生懸命働き続けていたにもかかわらず、苦しく貧しい生活を強いられた貧乏人にとって、神様を信じ続けることは難しかったのではないだろうか。もしくは、ペストや飢饉で命の危機に絶えず曝される中、人々は心のどこかで自分達を救ってくれない神様に対して不信感を抱いていて、それがこの父親の態度に反映されたのかもしれない。

これらのことから、神様の申し出を受け入れられなかったのではなく、受け入れることができない心的状況だったとも考えられる。しかし、それでもやはりこの父親は過ちを犯したと思われるのである。

その過ちとは、「平等」を重視した父親自身が差別をしたということである。父親は一番始めに出会った人に名付け親を頼もうと決めたはずなのに、自分の偏見で相手を選び好みし、死神を選んだ。結局、医者となった息子も身分によって人を差別し、「平等」に価値を置いていた父親を裏切っている。この医者は13番目に生まれている。キリスト教では「13」は死や裏切りを意味する数字とされている。つまり、不信心という形で神様を裏切った父親に裏切り者の息子を授けることで、父親を罰したのではないだろうか。このようにこの話には不信心者への戒めという要素が入っていると考えられる。

## (2) 医者への批判

2つ目に医者への批判が挙げられる。この医者は話を読む限り、どうにも医者に向いているとは思えない。なぜなら、身分によって人を差別し、利己的な判断だけで人の生死に介入しているからである。特に、何の医療知識や医者としての志もなしに死神から授かった力だけで医者になっている。

では、なぜこのような医者像が出来上がったのか、当時の人々の抱いていた死神のイメージと比較しながら中世ヨーロッパ社会を通して見ていこう。

中世ヨーロッパ社会において医者は市民権すら持たず、死刑執行人や風呂屋といった被差別民と同レベルに置かれていた<sup>(3)</sup>。なぜなら、中世初期の医療は民間伝承や魔術、迷信、手先の技術の混合に過ぎず、中世の拷問の一種だと評されるくらい未熟だったからである<sup>(4)</sup>。このような立場の中、さらに人々の印象を悪くしたのが医学上の教えをまったく受けたことのない無免許医達の存在だった。14世紀はまだ医師免許をもった医者が少なく、大半が無免許医だった。そんな中、ペストの流行と共に、無免許医が増えたが、彼らにはペストの原因や治療法が分からなかったため、ほとんどの人が死んでいった。しかし、免許を持った医者でも良い治療法を見つけることはできなかった。人々にとって免許医だろうと無免許医だろうと、医者なのに治せないことに多少の憤りや不信感はあったと思われるが、それでもやはり無免許医の方が風当たりが強かっただろう。無免許医の中にはインチキな治療で診察料を取っていた者もいたからである。それが余計に人々の不信感を強めたと考えられる。

こうした状況から見て、話の中の医者は無免許医側として批判されていると思われる。なぜなら、この医者は死神から生死を見分ける力と生かすための薬草を教えてもらっただけで、無免許医達と同じく何の医療知識も持っていないからである。そして何より、医者としての志が感じられない行動ばかりしていることから、お金目当てのインチキ医者に近い印象を受ける。

それでは、次に当時の人々が抱いた死神のイメージと比較しながら、医者について見ていきたいと思

う。

人々の抱く死神のイメージは「死神の名付け親」の原題、“Der Gevatter Tod”から知ることができる。Gevatterには名付け親、Todには死という意味があり、これらの単語で「死神さん」という打ち解けた呼び掛けになっている<sup>(5)</sup>。死神は死を司る恐ろしい神ではなく、もっと好ましいイメージを持たれた存在だったことが分かる。こうしたイメージは、死が苦痛や苦難からの解放とされていることから来ているのかもしれない。苦痛からの解放は医者とも共通しているが、その先が生か死かという点では異なっている。つまり、本来死神は医者と対をなす存在であるはずなのに、話の中の死神と医者は懇意の間柄であるし、話の途中まで医者は死神の指示に従い、人の生死に介入していた。これはペストの流行時、医者に治療の術がなく、死者が増え続ける日常を送っていた人々にとって、助けてくれない医者はもはや生を司る存在ではなく、死を宣告する死神と同一化していたことを示しているのかもしれない。

以上のように、当時の医者を取り巻く状況やペストの流行がこうした医者像を形成し、医者への批判に繋がったのではないかと考えられる。

### (3) 「死」の絶対性

3つ目に「死」の絶対性が挙げられる。医者が死神を出し抜こうと考えている場面で医者は、「怒るには怒るだろうが、自分は、何と言ってもあれの名付け子のことだから、死神も目をつぶってくれるだろう。思い切って、やってみろ」<sup>(6)</sup>と高を括る。しかし結局死んでしまったことから、「どんな人間だろうと絶対に死には勝てない」という現実をあえてメルヘンの世界で、死神にとって特別な存在である医者さえも死んでしまうという風に描き出すことで、より強く表しているように見える。また、地下世界で人間の命を模した蠟燭が並んでいるのを見ながら死神が「子供や若者でもちっぽけな燈明しか持っていないのがよくいる」<sup>(7)</sup>と言っていることや話の端々で死神や父親が死は平等だと話していることも死の絶対性を強く印象付けている。

あるいは、医者のように見苦しく足掻いて惨めな最期を迎えるよりも「死」を受け入れて生きる方が良いのではないかという、ある種の諦めが感じられる。実際、中世末期の人々の間には仏教で言う、「諸行無常」のような観念が広がっており、「死」からしか「生」を見ようとしなかった<sup>(8)</sup>。この話を通して、「死」の絶対性を教訓として伝えたかったのかもしれない。

## 2. 死神を出し抜いた医者

ここでは「死神の名付け親」の第2話を第1話と比較しながら、どのようなメッセージが込められているのか検討していきたいと思う。第2話は第1話と対をなす構成になっている。

では、粗筋から見ていこう。

ある貧しい男に息子が生まれるが、貧乏で誰も名付け親を引き受けしてくれないので、大通りで親切な人を待つことにする。そこへ聖母マリアが通りかかるが、男はマリアの息子が皆を平等に扱ってくれないとして、追いつ返す。すると今度は女性の死神がやって来る。男は皆を平等に扱う死神を気に入って、名付け親になってもらう。死神は男に息子を医者にする約束し、病人の生死の見分け方を教える。それから息子は評判の医者になり、お金持ちにもなる。そんなある日、お金持ちの所に呼ばれる。お金持ちは死の判定が出ていたのでそれを伝えると、全財産を渡すので助けて欲しいと懇願される。折れた医者はお金持ちを助けて死神に脅されるが、欲しいだけ財産を貰う。その後、長い間何事もなかったが、ある日おじいさんの所に呼ばれる。おじいさんも死の判定が出ていたが、彼の娘が助けを懇願する。医者は美しい娘に好意を持つが、死神を騙す気にはなれなかった。しかし、娘が段々いじらしくなり、おじいさんも娘を嫁にやると言って聞かないので結局助け、死神に最後の警告を受ける。医者は娘と結婚し、二度と死神を出し抜くの

はよそうと固く決意する。そんな時、病気の王様の所へ呼ばれる。王様も死の判定が出ていたので、そう伝えると、王様は家来に自分が死んだら医者も殺すように命令する。医者を殺そうと身構えている家来を見て、死が避けられないことを知った医者はどうせ死ぬなら名付け親である死神を試そうと決意し、実行する、という所で話は終わっている。この先だが、王様は助かり、医者は色々狡いことを考えて死神から逃れ、王様の跡継ぎに据えられたとあり、その先の詳しいことは分からないと記されている。<sup>(9)</sup>

以上の粗筋から所々、第1話との相違点が見られるが、特に大きい相違点となるのが医者の迎える結末である。

なぜ第1話の医者は死に、第2話の医者は助かったのだろうか。

それには理由の1つとして、医者への死神に対する「誠実さ」の度合いが関係していると考えられる。自身の欲を優先し、死神を蔑ろにした第1話の医者に比べ、第2話の医者は死神になるべく誠実であろうとしている。第1話の医者と同じようにお金持ちや王様を助けていることに変わりはないが、そこには死神を出し抜くことへの躊躇や、二度と死神を裏切らないという決意があった。

しかし、本当に誠実だと言い切れない点も2つある。

1つ目は医者が暗に病人が懇願してくるから仕方なく、死神を出し抜いているのだと仄めかしている点である。特に王様を助ける場面はそれが顕著だ。避けられない死を目の前にどうせ死ぬなら名付け親を試そうと実行する訳だが、そこには、こうしなければ自分は殺されるのだからこれは必要悪だ、必要悪なら許してもらえるのではないかという期待があったのではないだろうか。もしくは名付け親としての死神を試していたとも考えられる。

2つ目は医者としての道徳観が疑わしい点である。病人が懇願したからと言っても、恐らく医者が診てきた彼ら以外の病人も死を告げられた時、同じように懇願したのではないだろうか。それに仕方なくという割には結局財産や美しい妻や権力といった報酬を貰っている。たとえ報酬が無くても命を張って病人を助けたかは疑わしい。

治療に関しても思い付きのいい加減な処方、第1話の医者とは大差がない。

だが、いずれにしても医者は助かった。そのもう1つの理由は死を受け入れることにあったと考えられる。第1話の医者が最期まで王という世俗の権力を欲し、死を拒絶したのに対して、第2話の医者は結果的には権力を手に入れたが、避けられない死を前に死神あるいは死という自然の摂理を受け入れていた。

中世の神学者ゾイゼは自伝の中で、「何百万という者達の中に、私のように心の準備をした上で、死神の網に締められる者は一人もいないという次第である。分別とわきまえを持って死ぬ者は幸せである。虚しい名誉心、肉体の健康、儂い愛、そして生活の必需品の強欲な追求が多くの者達の目を眩ませている」<sup>(10)</sup> と言うように死を受け入れて生きることを説いている。これはどこかそれぞれの医者を表していると捉えられる。

また、第1話の中でも死神が「わしはな、お前の子供を金持ちにするし、有名な人にもしてあげる。わしを友達にするものなら、誰にでもそうしてやるきまりなのさ」<sup>(11)</sup> と話す場面がある。つまり、「死神の名付け親」は第1話と第2話で結末を変えることで、死を受け入れて生きよう、というメッセージを強く印象付けているように見える。

また、一方でゾイゼの自伝にもあるように、全ての人が死を受け入れられた訳ではなく、死に対して常に反抗する人もいた。<sup>(12)</sup> だから、第2話の結末はそういった人達の死神あるいは死への反抗が表れているとも考えられる。

## おわりに

「死神の使い」や「どうらくハンス」といった他の死神が登場する作品でも「死神の名付け親」同様、死の絶対性や平等性がメッセージとして込められている。そんな中、「死神の名付け親」は絶対的な死を前にどう生きるか、振る舞うかということに主眼が置かれている。この作品は中世ヨーロッパの人々の死生観に根ざして生まれたものであるが、絶対的な死を前にどう生きるかという問いは現代にも通じている。

中世ヨーロッパの人々は死神を通して、後生に絶対的で平等な死を認識させた上で、「あなたはどうか生きるか」という問いを投げかけているのではないだろうか。

## 註

- (1) ルース・ボティックハイマー『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』紀伊国屋書店、1990年、168頁。
- (2) 金成陽一『グリム童話のなかの呪われた話』大和書房、1996年、98頁。
- (3) 同上、78頁。
- (4) ジョン・ケリー『黒死病』中央公論新社、2008年、219頁。
- (5) 金成、前掲書、96頁。
- (6) 金田鬼一訳『完訳グリム童話集2』岩波文庫、1979年、41頁。
- (7) 同上、43頁。
- (8) 金成、前掲書、100頁。
- (9) 同上、48頁。
- (10) オットー・ボルスト『中世ヨーロッパ生活誌2』白水社、1985年、270頁。
- (11) 金成、前掲書、39～40頁。
- (12) ボルスト、前掲書、271頁。

## 参考文献

- 金田鬼一訳『完訳グリム童話集2』岩波文庫、1979年  
金成陽一『グリム童話のなかの呪われた話』大和書房、1996年  
ルース・ボティックハイマー『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』紀伊国屋書店、1990年  
ジョン・ケリー『黒死病』中央公論新社、2008年  
オットー・ボルスト『中世ヨーロッパ生活誌2』白水社、1985年

(担当教員 桑原 ヒサ子)